

荒波を越えて 独り立ちする力の育成
～ 「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業改善「特別の教科 道徳」を通して ～

十島村立小宝島小・中学校

1 研究のねらい

荒波を越えて独り立ちする力の育成のために、児童生徒に課題意識をもたせるとともに、課題を多面的・多角的に捉える思考の可視化を行い、自己の考えを再形成したり、新たな考えを創造したりする深い学びができる授業を実践研究する。

2 研究の概要

研究を進めるに当たっては、『「主体的な学び」とは』『「対話的な学び」とは』『「深い学び」とは』を本校なりに明確にし、研究の視点を設定して研究に取り組んだ。

3 研究の内容

(1) 視点1

導入時において、児童生徒の関心を高め、課題意識をもたせるとともに、課題解決へ向けた意欲を高める。

○児童生徒の実態把握と個別の手立ての検討 ○課題設定の工夫 ○ICT機器の活用

(2) 視点2

思考スキルや思考ツール等を活用した思考の可視化を通して、自己の考えを広げ、深めることができる場の設定を行う。

○発問の工夫 ○思考スキル・思考ツールなどによる思考の可視化 ○視覚的板書
○ICT機器の活用

(3) 視点3

まとめの段階で、自分の考えの再形成や新しい考えを創造できる場面を設定する。

○学習の練り上げ、見直し ○生活や履修内容と関連付ける振り返り

4 研究の実際

(1) 視点1について

身近な事象、現象、地域や家庭などから問題点を見いだせる工夫として、授業の前に、本時で学習する道徳の内容項目に関するアンケートを実施して活用した。また、アンケート結果から、課題意識を高めることが難しい実態が分かったときには、教師が課題意識を高めることができるような話題を提示するようにした。アンケート結果はICT機器を活用して提示した。

(2) 視点2について

ア 思考ツールについて

思考ツールを活用することで、児童生徒が自分の思考を明確にするとともに、個人内対話を行うようになり、自らの考えを広げたり、深めたりすることができた。

イ 視覚的板書について

(ア) 思考ツール（座標軸）・思考スキル（相違等）の活用について

読み物資料の価値葛藤場面の心情を、思考ツール（座標軸）で対比させて板書することで、どうして自分はこの考えになったのか、その根拠を児童生徒一人一人が明確にもつことができるようになるとともに、思考スキル（相違等）を活用し、一つの事象を多面的・多角的に捉えることができるようになった。

(イ) 思考ツール（SP表）の活用について

読み物資料の価値葛藤の場面を、思考ツール（SP表）にまとめて板書することで、登場人物が行った行動のよさ等に気付くことができ、より考えを深めることもできるようになった。



(ウ) 心情メーター・ネームプレートの活用について

心情メーターで読み物資料の登場人物の心情を表すことで、自らの中で価値葛藤している曖昧な部分（多様な考え）を明確にすることができた。また、座標軸上にネームプレートを貼り付けることで児童生徒同士の対話を進めることができるようになったり、心情メーターで表した心情とネームプレートで表した行動が矛盾していることに気付き、より考えを深めたりすることができるようになった。

(3) 視点3について

ア 児童生徒同士の対話について

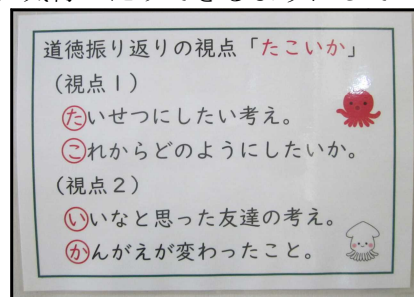
少しでも教師が関わらずに、児童生徒同士の対話が進み、考えを広げたり深めたりすることができるように、「もっと話したくなる言葉カード」を作成し、取り組んでいる。

イ 学習の練り上げ、見直しについて

授業の「振り返る」過程で、本時のめあてに対する自分の考えをまとめる時間を設定しており、導入時の考えから自分の考えが変わったり、他の考え方に気付いたりできるようにしている。

ウ 振り返りの視点による振り返りについて

「あたためる」の過程を設け、「た・こ・い・か」の視点から、授業を振り返り、道徳の授業で学んだことを今後の生活に生かせるようにしている。



5 成果と課題

(1) 成果

ア 導入時に、本時の内容項目に関する事前アンケートの結果や教師による話題を提示することによって、本時の内容項目に焦点化させ、課題意識をもたせることができた。

イ ワークシートや板書に思考ツールを活用することで、一人学級の場合でも考えを広げたり、深めたりすることができた。

ウ 心情メーターやネームプレートを活用することで、一人一人が思考を明確にもつことができた。

エ 終末時に、本時のめあてや4つの視点で振り返ることによって、自分の変容に気付いたり、自分がこれまでもっていなかった考えに気付いたりすることができた。

(2) 課題

教師が関わらずに児童生徒同士で対話を進め、考えを広げたり、深めたりすることが難しいため、対話を活発に行うことができるような手立てを今後も継続研究していく必要がある。

6 今後の取組

今後もより一層、児童生徒同士で対話を進め、自己の考えを再形成したり、新たな考えを創造したりする深い学びが充実できるように実践研究を積み重ねていきたい。